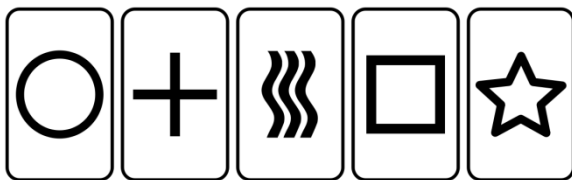


河城にとりの 水平思考

Lateral thinking of Bilocation





「ネス湖の奥底で幻想郷みたいに
別の世界と繋がっていたら……
ネツシーだって夢じゃ無いわ！」
—— 宇佐見堇子

ア

夏を過ぎ、秋の装いを纏う妖怪の山。九天の滝より続く溪流は、そこかしこに赤黄橙色とりどりの落ち葉をくるくると踊らせていた。ひと足早い季節の風がさわりと撫でる山肌で梢が揺れる。

「そういうことなら引き受けた。明日にでも取りに来てくれ。それまでにやっておくよ」
 答えも待たずかき消える依頼主の姿を見送って、河城にとりは忙しないあとと独りごちた。コンロの上で揺れるポットから珈琲をアルミカップに注いで口にはこぶ。

天高く秋、うららかな日差しの下、絶好の機械いじり日和である。鼻歌交じりに工具を広げ、作業に取り掛かったにとりはふと顔を上げた。

「さてと。……ん？」

清流が音を響かせる玄武の沢。穏やかな昼下がりに、青天を横切る飛行機雲一つ。はるか上空を横切った飛行機雲は、きらきらと星屑を散らして急旋回。瞬く間に地上へと降下してくる。

「……げっ!？」

その流れ星めいた輝きには、嫌と言うほど見覚えがあった。にとりは慌てて立ち上がり、光学迷彩のスイッチに指をかけるが——それよりも早く、光の尾を引いた筈が溪流

へと飛び込んでくる。

「ようにとり、精が出るな」

衝突の直前で一気に制動をかけた箒の上。白黒の魔法使いが片手を上げた。

普通の魔法使い——霧雨魔理沙は箒の出力を絞り、ふわりと溪流の岩場に着地する。色とりどりの落ち葉が舞い上がり、溪流の中へと吸い込まれていった。風圧で工具や部品が吹き飛ばないように、背中のリュックから伸ばしていたマジックハンドを持ち上げ、にとりは挨拶を返す。

「あー……なんだ、魔理沙か」

「なんだはないだろ、せっかく来てやったのに。……お？　なんだそりゃ。また新しい発明か？」

案の定、魔理沙は目ざとくにとりの広げていた基盤に目を付けた。今からでも白を切るべきかと迷うものの、どう考えても無理がある。にとりはリュックから伸びるマジックハンドをしまい、諦めて腰を下ろす。

「そうだよ。今忙しいんだ。だから邪魔しないでくれると——」

「いや、待て。違うな。どつかで見た覚えがあるぞ……」

岩場の上に並ぶ分解された外装、小さなネジに電池、基盤、そしてそれらを分解する工具をじっと見つめ、むむむと眉をよじり悩むことしばし。地面に落ちていた一枚のカードに目を止め、魔理沙はぼんと手をたたいた。

「そうか、董子のやつが持ってた『すまーとほん』か！」

バレた。にとりは天を仰ぎ、マジックハンドで顔を覆った。そう。先日、幻想郷の結界を破壊しようとして一大騒動を起こした外来人、宇佐見童子の持ちモノである。新し物好きの魔理沙が興味を示さなはずがない。

魔理沙はにやにやと帽子のつばを弾き、にとりの肩に手をまわしてくる。

「……おいおいなんだ、ついに河童も盗みに手を染めたのか？」

「そりゃ魔理沙特有の習性だろ。一緒にされちゃ困るね。だいたい、水に浸かったら使えない物にならない電話なんて、わざわざ手に入れる理由ないじゃないか」

「私は借りてるだけだぜ。死ぬまでな。……ともかく、じゃあなんでそんなもんお前が持つてるんだ？」

「商売。正式な依頼さ。修理して欲しいって頼まれたんだよ。だからこいつは貸さないし渡さないからね、魔理沙」

しっかりと釘を刺し、にとりは魔理沙から庇うように部品を抱え込んだ。白黒魔法使いに背中を向けるように座り込んで、作業を再開する。

取りつく島もないにとりに苦笑し、魔理沙は足元から拾い上げたカードに目を落とす。白地に星型の模様が刻まれたそれは、童子が弾幕に使っていたものである。彼女いわくESPカードというもので、裏返して伏せ模様を当てることで、透視や予知の超能力の訓練に使うらしい。

魔理沙はカードを裏返し、ふと眉をよじって首を傾げた。

「……なあ、おい、にとり？ これ——」

「なんだようもう。いま大事なところなんだってば。珈琲でもなんでも勝手に飲んでて」
「なるほどな。わかった、待たせてもらうぜ」
どうせ大した用事でもないしな、と魔理沙は近くにあったアルミカップにポットの珈琲を注ぎ、抱え込むようにして口へと運んだ。

イ

じいじいと鳴く蟬の声が、溪流を転がる岩に沁み入る。木漏れ日の中、魔理沙は冷えたラムネをぐいと呷った。沢の底で冷えた炭酸がしゅわしゅわと喉を落ちてゆく。

「うーむ。最高だな」

「他人の金で飲むラムネは美味いかい、盟友」

「おう、素晴らしいな」

普通の魔法使いが玄武の沢上流に住む谷河童と知り合ったのは、数年前の秋のこと。守矢神社の騒動の折、にとりの使ってきた不思議な弾幕に興味を示した魔理沙が彼女の対空魚雷を（勝手に）持ち出し、点火して爆発事故を起こしたのがきっかけであった。

「あの時は驚いたよ……いきなり大爆発とか、勘弁して欲しいよね本当に」

「だってなあ、いじってたらいきなりドカンだぜ？ 危ないならそう書いておいてくれないと駄目だと思うぜ」

「まさかミサイルに直接火をつけようとかするなんて思わないっての」

「そうなのか？ 昔貰ったやつは命令するだけで飛んでったぞ。前後左右空中静止も思いのままだ」

「なにそれこわい」

そのミサイルは今も魔理沙宅の物置に転がっているという。今度見せてよとせがむにとりに、魔理沙はいいぜと安請け合い。実際にあの魔窟となった物置をひっくり返す労力に考えたとしても見合わないのだが、それは敢えて口にしない。

「で、どうしてあんなことしようと思ったのさ？」

「んー……」

「話せよう。いまさら隠すことじゃないだろうー？」

ぱしぱしと肩を叩くにとりに、魔理沙は帽子のつばをぐいと引き下げ、

「月に行く実験をしようと思っただけ」

「月に？」

先日の、紺珠を巡る一件で魔理沙は月に行ってきたばかりではないかにとりは首を傾げる。が、魔理沙はそうじゃないと首を振った。

「その前だ。レミリアがロケットを打ち上げて月に行こうって息まいてただろ」

「ああ、あれかあ」

間欠泉騒ぎの前の話だ。第二次月面戦争を題目に、幻想郷の妖怪たちが月へと攻め込む計画を立てた。紅き館の吸血鬼の主導で住吉三神を動力とした三段ロケットが建造さ

れ、月へと打ち上げられたのである。

裏側ではすさまじい妖怪の暗躍もあつたとされ、様々な思惑が複雑に絡み合つた事件であつたが、結局のところ事件の全容を把握している者はあまりいない。

「玉兎たちが行き来してるのは知つてたしな。あの時は月くらい、簡単に行けると思つてたんだよ」

私は私の方法で月に行くだけだ――

紅魔館で盛大にパーティまで開かれた住吉月面侵略計画の最中、そう豪語した魔理沙だが、いざ実践するにあつてその困難さに気づいたのだという。

「レミリアに今更頭を下げるわけにもいかなかったからな、何かほかにロケットがあればと思つたんだぜ」

「あつはつはつは！ そりゃ傑作だ！」

「……そこまで笑うことないだろ」

帽子で顔を隠して不貞腐れる魔理沙。にとりはごめんごめんと両手を合わせる。結局、

魔理沙はロケットにこつそりとタダ乗りで同乗するという「魔理沙らしい」方法で月に同行し、言葉の帳尻を合わせた――のだが。

「……たぶん、霊夢の奴には気づかれてるんだよな、あれ」

「そいつはご愁傷さまだねえ」

からからと笑い、にとりは自分のぶんのラムネを一口。結局のところ、結界を抜ける算段をしていなければどうしたところで幻想郷を出ることはできなかったはずである。

短慮に走らなかった魔理沙は、賢明であるともいえた。

「まあ、きちんと話さえてくれれば月まで飛ぶロケットくらいなんとかなったかもしれないけど」

「マジか」

「マジだよ。そういうの得意でやってる仲間がいるしね。覚えてないかい、あの黒髪のおかつぱの」

「……ああ」

にとりと良くつるんでいる黒髪の河童の一人を思い出し、魔理沙は手を打つ。彼女は火砲や火薬を好んで扱う河童なのだという。鉄砲好きが高じてサバイバルゲームにのめり込み、河を出て山童になるくらいだから筋金入りだ。

「うーむ。大砲で月に打ち込まれるのは勘弁願いたいぜ」

「もつとでかい魔砲ぶっぱなしてる奴が何言ってるのさ」

呆れた様子のにとりに、魔理沙はますます複雑な表情になるばかりであった。

ウ

ぱらつく雨は朝からずっと降り続いていた。月面戦争の第二十三次祝賀会と称した昨夜の飲み会で帰るタイミングを逃したまま、魔理沙は朝から河原沿いの洞窟にいた。に

とりが所用で席を立ち、いまは彼女ひとりである。しばらく手持無沙汰にしていた魔理沙だが、やがて洞窟の隅にある河童のリュックへと興味は移っていた。

にとりと出会ってけっこう経つが、いまだに彼女には謎が多い。そもそも、こんなに馬鹿でかいものをどうしていつも背負っているのかということも、考えてみれば今まで疑問に思ったこともなかった。

「どれどれ……」

思いついたら即実行が普通の魔法使いの信条だ。リュックに近付いた魔理沙は、おもむろにその肩紐に手を通し、立ち上がろうとする。

——が。

「よっ……ほっ……くぬっ……うおおお……!!」

案の定というべきか、予想外に言うべきか。いくら踏ん張ってもリュックはびくりともしない。

人ひとりが隠れてしまえそうなサイズだ、そんなに軽いものだとは思っていなかったが、にとりはこれを背負って軽々と沢道を上り下りし、弾幕戦をこなす。

「っ……!!」

渾身の力を込め、顔を赤くして力を籠めるが、リュックは持ちあがるどころかわずかに動くこともなかった。ぜいぜいと肩を上下させ、魔理沙はその場に尻餅をつく。

「何が入ってたんだ、これ……」

「ひとのものを持っていこうってのは感心しないなあ」

「げ」

顔をひきつらせる魔理沙の前で、光学迷彩から顔を出し、にとりは腰に手を当て頬を膨らませる。

「いくら盟友のすることでも許せることと許せないことがあるよ」

「ああいや、前から気になってたんでな。ちよつと試してみただけだぜ」

「嫌な予感して戻ってきてみれば。……まったく、油断も隙も無いね」

魔理沙からリュックを取り返し、ひよいとそれを持ち上げるにとり。身長で言えば魔理沙より頭一つ低いのだが、リュックの重量などまるで感じさせずにやすやすと背負い紐を肩にかける。

鬼や天狗の力に隠れて良く見過ごされてしまうが、河童の怪力は脅威である。小さな子供のような背丈の河童ですら、大横綱をかるがると投げ飛ばすのだ。仏飯でも食べていなければ相手にもならない。

「何が詰まってるんだ、それ。まともな重さじゃないぜ」

「いろいろさ。工具に、発明品に、弾幕の道具に、通信に使うやつとか、商売道具。あとは……不埒ものを逃がさないような罠とか、ね」

言うが早いのか、リュックのふたを開けて飛び出したマジックハンドが、がっちりと魔理沙の両腕を拘束する。咄嗟に身をよじって逃れようとする魔理沙だが――

「な、なにす……うひやははは!! や、やめろにとりつ」

「本当、油断も隙も無いなあ」

くすぐったさに喚く魔理沙を押さえつけ、スカートやエプロン裏の隠しポケットからいくつかの品を取り出して、にとりは吐息。あのわずかな時間で白黒魔法使いがこっそりとくすねていた品々である。

「魔法使いやめて泥棒はじめたほうが大成するんじゃないかね」

「いいじゃないか、ちよつと借りとうと思っただけだ。知ってるか？ 魔法使いには盗賊技能も嗜みなんだぜ」

悪びれもせず答える魔理沙。にとりも貸すこと自体は吝かでもないのだが、どうせ使えもせず工房の隅に積み上げられて埃を被るだけになるのは周知の事実である。取り返したものを検めながら、にとりはん？ と首をひねった。

「……懐中電灯？」

言わずと知れた、蓄電式の照明器具だ。水中洞窟の調査などに使われるもので、河童製とあってむろん完全防水である。

「ああ。ちよつと気になってな。里じゃ買えないし、香霖のやつは役に立たなくて困ってたんだぜ」

「まあ、それくらいならあげてもいいけどさ。魔理沙になら使えるだろうし」

妖怪の道具は必ずしも人間に扱えるとは限らない。妖怪にとって妖力というのは持つて生まれた力であり、息をするように、体温が人肌であるように当り前のことだ。

河童の道具は開発者である彼女たち自身知らないうちに、そうした微弱な妖力を使うことを前提に作られていることがある。精密な動作をするものほどこの傾向は強く、そ

んな道具はただの人間には動かすことができない。霊力や魔力を持ち、それを自覚的に操れる人間は幻想郷でもそう多くはないのだ。

しかし、魔理沙も魔法使いの端くれである。明りを灯すくらいのことは造作もないはずで、なぜいま懐中電灯などを欲しがるのか、にとりにはいまいちピンとこない。

「そんなもの何にするのさ？」

「ちよつと弾幕にな」

「弾幕？」

「おっと。詳しくは企業秘密だぜ」

唇の前に指を一本立て、にししと笑う魔理沙。また何か悪だくみをしているのだろうか、にとりは努めて訊ねない事にした。余計な首を突っ込んで巫女にとつちめられるのは避けておきたい。

「いいよ。あげる。それくらいなら里に流されたつてお咎めないだろうし」

「サンキュな。恩にきるぜ」

懐中電灯を手に、ほくほく顔の魔理沙はそれを大事に鞆にしまうと、にとりの向かいに腰を下ろす。

「なあ、そう言えば、お前達つてなんでそんなに発明ばっかしてるんだ？」

「そりゃあねえ魔理沙、魔法使いがなんで魔法を使うのかつて聞いているのと同じだよ」

かつての河童は、傷を治す秘薬や酒の湧き出る徳利などを持ってはいたものの、ここまで科学技術に傾倒してはいなかった。彼らが発明技術に目覚めたのは、外の世界の

文明開化——鎖国が解かれ西洋の科学技術や思想が流入してきたのが契機であるらしい。今のような河童の集落と工房が完成したのは、幻想郷が設立されてからだという。

とはいえ。河童の性質が大きくギークに傾き、技術開発に向いていたのは確かだろう。

「私らは人間が大好きだ。だからさ」

鬼が、人の畏れによつて鬼となり、天狗が、人の高慢を得て天狗となつたように。

観察を続けた人間たちの生活、その中に根付いた技術に魅入られ、河童は河童になつたのだと、にとりは盟友に微笑むのだった。

I

生憎と、満月だというのに曇り空の夜であつた。白いガス灯の明かりの下、白黒魔法使いと谷河童が、プラネタリウムを使つた次の悪だくみをしていた時のことである。

「……へえ、じゃあ伊吹童子座は人間の世界じゃオリオン座なんじゃないのかい。西洋でも女好きなんてのは一緒なんだねえ」

「てつきり妖怪はもつと妙ちきりんな星座を使つてるのかと思つたぜ。……ん？」

ふいに灯りがちらついた。魔理沙の傍らで大きな装置が低いうなり声を立てはじめる。にとりがすかさず機械の端にある蓋をあけ、そこに緑の液体を流し込むと、ほどなく先ほどよりも煌々とした輝きが灯り、河原の夜闇を押しつける。

「なあ。それ、前からそんな使ってたか？」

「あー、これ？ 最近思いつんだんだよね」

【河城大工房】のタグを打ち込まれたメッキの箱は、内部に交換式の燃料を入れて動かす、胡瓜式蓄電池である。この電池、河童の製品の中で特に重宝される品だ。なにより、河童性の道具を妖力や魔力なしで動かせるというのが大きい。

先日のオカルトボールの異変や、その前の仮面舞踏会の異変では、大容量の妖力バッテリーを持ち込んだにとりは幻想郷各地の有力者、大妖怪と真つ向渡り合うほどの大立ち回りを見せた。それを可能にしたのが、あらかじめ妖力をチャージしておくことで一時的に大火力を振り出せるこのバッテリーである。

「お前、確か前は他の人間に発明品使われるの嫌だって言ってたかったか？」

「あー、うん。ちょっとね、思うところあってさ」

「……ふむ。リーダーも大変なんだな」

「そんな大したもんじゃないって。じい様が勝手に引退しちゃったから仕方なくだよ」
照れ隠しなのか、マジックハンドが伸びてつんつんと指をつつき合わせる。

にとりが河城大工房の工房長を任されたのは、地底行の後のことだ。もともと彼女は河城集落の中でも有望な若手河童であり、いずれは集落の代表を率いることになるのは決まっていたらしいが、博麗の巫女や守矢の神々に出会ったことで、対外折衝的な能力を買われることとなったらしい。

「みんな好き勝手やるから、大変なのは本当だけどねえ」

元来、河童はチームでの作業を好まない。めいめいが好き勝手に興味の赴くまま道具を作り発明をするため、多くの発明品は発明者である河童にしか使えないことがほとんどだ。設計図に使われる単位すらキューリだのカンバーだのカッパーだのとめいめいが勝手に決めているのだというからたちが悪い。

一見同じ懐中電灯でも、動く原理や機構は全く異なっていたり、遠隔通信機を作っても通信の規格までもがまったくバラバラで、違う河童の製品どうしでは話すことが出来なかったり。

そういった状況が少しずつ改善を始めているのは、にとりが工房長に就任してからである。彼女を中心にした若い河童たちが、共通単位、共通規格を作って相互の部品や技術を融通し合ったり、チームで作業を分担して大規模な工事を行うなどの作業を行っていた。里の人間たちとの交流も、以前よりはぐっと盛んになった。

「魔理沙のおかげだよ」

「……なんで私が出てくるんだ？」

「地底の時。あの時、魔理沙と一緒にいろいろ開発したのが楽しかったからさ。それまでは、正直、なんだって自分一人でやらなきゃ思う通りにできないって、他の奴に触らせるのなんか御免だって思ってたけど、自分も思いもしないアイディアとか、全然違う考え方を知るの面白かったんだ」

「お、おう」

今度は、魔理沙の照れる番だった。

「ミサイルが撃ち辛いとか、光学迷彩が役に立たないとかさ、好き勝手言いやがってっ
て思ったけど、細かいところいじって直したものが良くなったのは間違いないし」
自分以外の誰かに、発明品を使ってもらうこと。そんなことは思いもしなかったとい
う。河童の意識改革にいつの間にか関わっていたと聞かされ、魔理沙はどうこたえてい
いか分からないままに、ポケットの瓶詰金平糖を口にするのだった。

オ

「はいはい、いらっしやいませー！ どうもお待たせしましたー。本日はどんな御用
で……ってなんだ、魔理沙か」

水際に張られたテント、『河城商店』と掲げられた看板の下。リュックから伸びたマジ
ックハンドで算盤をはじき、ぴかぴかの営業スマイルで現れたにとりは、一転目の前の
白黒魔法使いをみて大げさに溜息をついて見せる。

「おう、ちよつと野暮用だぜ」

露骨に肩を落とすにとりに、魔理沙はちよいちよいと手に提げた荷物を示してみせた。
幻想郷随一の人形遣いの手による、機械式自律機構に使われる唐練り糸である。

「この前頼まれてたやつだ。アリスのやつ誤魔化すの大変だったんだぜ？」

「わお、さすが盟友！ いやあ、楽しみにしてたんだよ！ 持つべきものは盟友だねえ！」

再び熱い手のひら返して魔理沙に飛び付くにとり。それなりに付き合っても長い白黒魔法使いであるが、いまだにこの谷河童の機嫌は良く分らない。

「そうだ。そろそろ昼にしようと思ってたけど、食べてくかい？」

「あー……そうだなあ」

最近すっかり涼しくなった。胡瓜のフルコースなど出てきても困るぜ、と言いかけた魔理沙の前で、にとりはくすくすと笑いながら。

「他にもあるから安心しなよ。ちよつと待ってな、今から捕ってくるよ」

「捕る？ なにをだ？」

「魚に決まってるだろ」

釣竿もなしにどうするかと思つていた魔理沙の前で、にとりは躊躇いなく河に飛び込んだ。どぼんと白い水柱を上げ、深い淵の中へと沈んでゆく。魔理沙が水面を覗きこもうと沢縁に近付いた途端、今度は溪流の中からざばんと再び水飛沫が跳ねた。ひと抱えもある丸い水の塊を手にとりが水から上がってくる。

「ふう、大漁大漁、と」

水塊をの中には、丸々と太った鮎が十匹ばかり、ところ狭しと押し込められていた。河底の水流を操り、魚の目を回して捕まえたいらしい。実に鮮やかな手並み、わずか数秒で驚くべき釣果(?)であった。

「魔理沙、火、熾してくれる？」

「お、おう」

言われるままに八卦炉を置く魔理沙の隣で、にとりは鮮やかな手つきで鮎の腹を裂いて内臓をとり、背の血合いも掻き出して竹串に刺した。塩を振って軽く酒を噴き付け、中火でじっくりと焼く。

竹串を伝う脂を見て焼け具合を確かめ、にとりは満面の笑顔。

「鮎は焼くのが一番だね。……ま、生でも美味いけどねえ」

串ごと持ち上げ、腹からぱくりと齧り付けば、じゅうと焼ける脂の音。あちちと舌を出して河童は顔をほころばせる。ほどなく鼻をかすめる淡草の匂い。脂は少ないがさわやかな白味であった。やや骨ばっているがそれも一味だ。

「んむ。……美味しいな」

「だろ？ ここに住んでるのは特に美味しいのさ」

キュウリウオの別名の通り、鮎は河童が好んで食する魚だ。なお、似たような近縁種にわかさが居り、霧の湖に住む人魚は実のところ河童の好物であるのだとかなんとか。

「そう言えば魔理沙、知ってる？」

「あん？」

「こいつら、結界の外から超えてくるんだよ」

そう言っただけで鮎の骨を示すにとり。もともと塩焼きにかぶりついてた魔理沙は、それを聞いてほうと竹串から口を放した。

鮎は河口近辺の汽水域で産卵し、成熟した個体は故郷の川を遡上して淡水に暮らす。この時に鮎の成魚は結界を通過して、親の育った幻想郷へと帰ってくるのだという。

「ほう、そいつは知らなかったな」

「ずっとこっちの湖の中で暮らしてる奴もいるけどねえ。私はそちよりこいつらの方が好きだな」

魔理沙はかぶりついた身を飲み込むと、スカートのポケットから拡大鏡を取り出し、じつと鮎を覗きこむ。にとりの言う通り、焼けた皮の表面に僅かに残る魔力痕跡が認められた。結界を越えて外界から流れ込むものに特有の反応である。

「ふーむ。結界ってのは頑丈なようで案外そうでもないのか」

「強い力をもってる妖怪ほど影響を受けるとか聞いたことあるね。動物や道具は出入りしやすいんだってさ」

食べ終えた鮎の骨を再び串に刺し、火で炙りはじめるにとり。骨酒でも作るつもりなのだろう。彼女に倣いながら、魔理沙は鮎を見降ろして顎を撫でた。

「すると、こいつらもわざわざ忘れられに外の世界から戻ってくるのか」

「どうだろう、案外このが暮らしいいのかもしれないよ？」

「そんで釣られてりゃあ世話ないぜ」

呆れ顔の魔理沙だが、事実として幻想郷の外からやってくる者たちは存外多い。案外、外の世界は息苦しくてやっていられないのかもしれないと、にとりは思った。

ア

ゴーグルの内側を満した水が、能力によって屈折率を操作され、拡大と縮小を繰り返す。五本の指に様々な器具を掴んでは、にとりは慎重に端末を分解していった。

概ね機能は把握できているが、詳細な部分の仕組みは手探り状態だ。なにより防水がまったくないというのは問題である。

カバーをとり、液晶を脇にだけ、基盤をふたつに外し、それを保護するゴム板も慎重に、順番を間違えぬように並べていく。そろそろと横からに伸びてきた魔理沙の手を、マジックハンドでぺしんとはたいた。

痛てて、と手をさする魔理沙に、にとりはゴーグルを押し上げて吐息。

「……言つたら、邪魔しないでくれよ。でかい儲け話なんだから」

「ふむ？ そいつを直すと宝の地図でも出てくるのか？」

「……外れ……でもないかなあ。新しいオカルトボール貰うって約束だし……おっと」

つい口にしてしまつてから失言に気付き、にとりはマジックハンドで口を覆う。が、耳敏い魔理沙はしっかりと聞いていたようだ。不敵に笑みを見せる魔理沙に、にとりは分解中の端末を抱え込むようにして後ずさる。

「なるほどな。大体わかつたぜ」

「……まさか、巫女に言い付けるつもりじゃないよね？」

がしゃん、リュックから水圧銃がポップアップ。二丁拳銃めいて構えた銃口を向けられながらも、魔理沙はひらひらと手を振ってみせた。

「それこそまさかだぜ。そんなことして何の得があるってんだ？ それよりも」

「な、なんだよう」

銃を押しつけ、ずいど迫る魔理沙に、にとりは思わずのけぞった。近い、顔が近い。

「そりゃあな、私も一枚噛んで分け前もらう方がよっぽどスマートじゃないか？」

しばし無言で見つめ合い、にとりと魔理沙はどちらからともなく顔をほころばせ、がつちりと固い握手を交わす。

「さすが盟友。話が分かるね」

「付き合いも長いからな」

魔理沙は端末のカバーをつまみ上げ、しげしげとその裏を覗き込んだ。

「しかし、董子のやつこんなところにも来てるのか」

「こんな所って失敬だなあ。……まあ、そりゃさ、人間に来てほしいところでもないし簡単に来れるところでもないけど。なんだか知らないけどそこらじゅう歩き回ってるみたいだね、あの人間」

「外の世界には無いモノばかりだとか言ってたな。何が珍しいのかはさっぱりだが」

「早苗もそんな感じだったよねえ。今じゃすっかり馴染んでるけど」

二人の脳内に同時に現れ、ガッツポーズを決めて去っていく風祝。実に奇跡の無駄遣

いである。

「忙しいのは実に結構なことだな。私ももう一人二人自分が欲しいぜ。面倒なことはそいつにやらせて、宴会三昧だ」

「何人いても一緒に飲んだくれるだけじゃないかなあ……」

苦笑いのにとり。あるいは、どっちが一番かお互いに譲らず弾幕三昧かもしれない。ひとしきり一緒に笑っていた魔理沙だが、ふと表情を引き締める。

「なあ、やっぱり気になるんだが、そのスマートホン、あいつが結構大事にしてたと思うんだが……。お前に修理頼むなんて変じゃないか？」

「へ？ どうして？ まさか河童が信用できないとでも言うつもりかい？ 盟友」

ゴーストを上げ、不機嫌をあらわにするにとり。しかし魔理沙は先ほどのカードを取り出し、にとりに押しつけた。

「違うぜ。よく考えてみる。あいつがこつちに來れるのって、あいつが向こうの世界で眠ってる間だけなんだろ？ だったら外の世界に戻ってから修理するなり、買い変えるなりすればいい話じゃないか。いくらお前が機械に詳しくたって、外の世界の何から何までちよちよいのちよいつて訳にはいかないはずだ」

「……まあ、ね」

不承不承で頷くにとり。遺憾ながら、幻想郷一を誇る河童の科学とても、外の世界から流れついた最新の機器までは及ばないことだである。この形式の端末は、以前から何度も触ったことがあるし、河童の間でも似たような発明が独自に作られている。そん

なわけ修理を引きうけることができたのだが……。

「オカルトボールだって無料じゃない。結構貴重なものも使われてるらしいし、苦勞したって言ってたからな。そんな手間暇かけてまで、幻想郷でお前に修理をさせる必要なんかないと思うぜ？」

「そんなこと言われても。直してほしいって頼まれたのは確かだけど、なんだかやたらに必死だったし、急いでたし……なんでもするからとか言われて、つい」

「それでオカルトボールか」

件の異変以来、オカルトを操る力は嚴重に管理されている。仮に彼女の手元にまだ素材となる呪物が残っていたとして、堇子に本当に渡すつもりなどあったのだろうかと魔理沙は訝る。

「ま、次に会った時にでも聞いてみりゃ——」

「待って！」

言いかけた魔理沙を遮り、突如マントをなびかせ現れたのは、黒髪に帽子の女子高生。

まさに話題の相手の宇佐見堇子である。呆氣にとられる二人の前で、額に汗、ずれた眼鏡を押さえ、彼女は大きく息をつきながら——

「ね、ねえ！ ひよっとしてさつき、ここに私が来なかった!？」

実に胡亂なことに、そんなことを言つてのけたのであった。

（宇佐見堇子の並行世界へ続く）

【奥付】

「河城にとりの水平思考」

初版 平成27年10月12日

エンジニアワルツ 第3回

発行 オルハザカサンパンチ 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者: 銅 あながねおりは 折葉

※本作は「上海アリス幻楽団」様の
「東方 project」の二次創作です。





河城にレリノ水平思考

著：銅おりは／折葉坂三番地

<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>

表紙イラスト：前山三都里

<http://www.pixiv.net/member.php?id=86033>